

平成21年 5月25日現在

研究種目：基盤研究(B)
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18330100
 研究課題名（和文） 変動期における高校生の社会意識とアスピレーションの形成過程
 研究課題名（英文） Social change and the formation of social attitudes and aspirations of high school students
 研究代表者
 木村 邦博 (KIMURA KUNIHICO)
 東北大学・大学院文学研究科・教授
 研究者番号：80202042

研究成果の概要：2007年に「教育と社会に対する高校生の意識」第6次調査を実施し、分析結果を冊子体の報告書として刊行した。全体的に高校生・保護者とも格差に敏感になったが、ゆとり教育の影響は明確でない。約20年間に高校生の専門職志向が高まったが、近年では安定志向も強まりフリーターのイメージも悪化した。また近年、高校生の学習意欲が高まったが学習方法の変化は見られない。高校生の規範意識にも変化が見られない。保護者から高校生への期待に、自律性より同調性を重視する傾向が強まった。父不在高校生の大学進学希望率の低さも確認された。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2007年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2008年度	2,300,000	690,000	2,990,000
年度			
年度			
総計	5,800,000	1,740,000	7,540,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：階層・階級，教育，ジェンダー，社会意識，職業，社会移動，アスピレーション，労働市場

1. 研究開始当初の背景

(1) 現在、日本社会では様々な側面で「改革」が実行され、日本社会は大きな変動期あるいは転換期を迎えているといえる。おそらく未来から21世紀初頭を振り返ったとき、現在この時期が日本社会にとって大きな意味を持っていたと評価されるのではないかと考えられる。

(2) 特に、20世紀の後半から少しずつ実施されてきた「教育改革」は、いわゆる「学力論

争」を引き起こしながら、2003年の高等学校への新指導要領の導入でひとつの区切りを迎えたけれども、その後の推移を見てみると、教育の世界にいわゆる「新自由主義」的な原理を持ち込むという流れは着実に進められていると言ってよい。これは、一方では教育の「多様化」や「個性重視」をもたらすものと見なすこともできるけれども、他方では社会階層的背景による教育機会の格差の拡大をもたらすのではないかと指摘もある。

(3) 他方で、雇用・就業という側面で見ても、「新自由主義的」な原理に基づく「経済改革」の影響が現れてきている。「民営化」の流れが推し進められることにより公共セクターの役割が縮小されて来ているだけでなく、「雇用の流動化」、すなわち正規雇用のシェアの縮小と非正規雇用のシェアの拡大、失業率（特に若年者失業率）の緩やかな増加、いわゆる「フリーター」や「ニート」と呼ばれる若年者の増加などが、人々の注目を集めるようになって来た。また、これと連動する形で、高校生の就職にあたり、職業高校と企業との結びつきの果たす役割が弱まってきているとの指摘もある。ここにおいても、社会階層という視点で見た場合に「格差拡大」の兆しが見られるのではないかという見解も出されている。

2. 研究の目的

(1) この研究の目的は、上述のように様々な意味で「変動期」にあり、高校生とその保護者を取り巻く環境が大きく変化している現在の日本社会において、高校生（およびその保護者）の社会や生活に対する意識（不公平感、満足感、性別役割意識、就業意識など）とアスピレーション（教育アスピレーション、職業アスピレーション）がどのような特徴を示すのか、またこれらの意識の形成過程はどのようなになっているのか、さらにその形成過程が過去と比較した場合にどのような変容をみせているのか、ということ、実証的に明らかにすることであった。

(2) そのために、高校生とその保護者の比較的代表性の高いサンプルを対象として、「教育と社会に対する高校生の意識」第6次調査を実施し、それによって得られたデータの計量的分析を行い、その結果を社会階層と教育などに関する理論的な考察と結びつけることを目指した。

(3) また、これまでに実施してきた「教育と社会に対する高校生の意識」調査（第1次～第5次調査）のうち、仙台圏以外の地域を対象とした第2次調査を除く4回の調査結果との比較から、約20年間にわたる長期的変化や、特に近年に特徴的な傾向を明らかにしようとした。

3. 研究の方法

(1) 「教育と社会に対する高校生の意識」第6次調査の企画・実施のために、4回の研究打ち合わせ会議を行った。この研究打ち合わせ会議では、第5次調査までのデータを用いた研究発表とともに、「企画書」の作成、調査票の作成（全体の構成、質問項目、質問文案の検討）を行った。

(2) 並行して、後項の先生方との懇談会を開催し、高等学校における学習指導・進路指導・生活指導の現状と課題などに関する教示をいただいた。また、「企画書」を持参して、宮城県教育庁高校教育課、宮城県総務部私学文書課、仙台市教育局を訪問し、調査に対する指導・協力をお願いした。

(3) 「教育と社会に対する高校生の意識」第6次調査を実施した。

① 理論母集団は、仙台圏のすべての高校の生徒とその保護者（両親）である。対象者の抽出は、有意抽出（層化三段抽出法）によって行った。第1次抽出として、われわれがこれまで実施した調査を踏襲し、仙台圏の全ての高校を、公立・私立、共学・別学、普通高校・専門高校などの基準によってグループ化して、できるだけ全体の縮図となるよう、グループごとに調査を依頼する高校を選んだ。同時に、過去の調査との比較がしやすいように、特に第5次調査と第1次調査でご協力いただいた高校が含まれるようにした。（第3次・第4次調査との比較可能性ということにも配慮した。）第2次抽出として、上記の高校から、各校の協力者と協議の上、調査対象となるクラスを選択した。2年次生を対象とし、各校原則として3クラスを抽出した。第3次抽出として、当事者および関係者の承諾を得た上で、最終的に抽出されたクラスの生徒全員とその父母（保護者）を調査対象者とした。

② 以上の結果、第6次調査の対象校は12校となった。（実際には13校に依頼したが、1校からは協力の意思が明確に示されなかったためその学校での調査を断念した。）計画サンプル・サイズは、親子1551組となった。

③ 実査は、2007年10月～12月の間に行った。実施の具体的な日時は、各高等学校の協力者の判断に委ねた。高校生に関しては可能な限り「自記式集合調査」（不可能な場合は「自記式配票調査」）によって行った。保護者に関しては、生徒を通じて配布・回収を行う形での「自記式配票調査」によって行った。

④ 有効回収票数（公式データ）は、高校生1231、父親934、母親1157、であった。回収率は、高校生が79.4%、父親が60.2%、母親が74.6%となった。

(4) 2008年3月に、主要な単純集計結果などをまとめて「速報」を作成し、調査対象者・調査協力者に配布した。

(5) 2008年5月から8月にかけて、自由回答部分の追加データ入力やデータ・クリーニングを経て、公式データを完成させた。

(6) 2008年度には2回の研究打ち合わせ会議を実施し、研究代表者・連携研究者・研究協力者がそれぞれの研究テーマに関する分析結果の中間報告を行った。

(7) 並行して、日本行動計量学会第36回大会、

第 47 回東北地区私学教育研修会などで、研究報告を行った。

(8) 以上のような活動を通じて、研究代表者・連携研究者・研究協力者がそれぞれ、『教育と社会に対する高校生の意識—第 6 次調査報告書—』の原稿を作成した。互いに原稿の査読を行い、互いのコメントをもとに原稿の改訂を行った。さらに、高校の先生方にも原稿を読んでいただき、懇談会を開催してその席で原稿に対するご意見を伺った。

4. 研究成果

(1) 本研究の成果は、2007 年 3 月に、『教育と社会に対する高校生の意識—第 6 次調査報告書—』を刊行して公表した。

(2) 全体的に高校生・保護者とも格差に敏感になったが、「ゆとり教育」の影響は明確でないことが明らかになった。しかし、時代の変化の反映といえる知見もあれば、時代の変化を強調する通説と異なり変化が見られない知見や、新自由主義の浸透やゆとり教育の影響などを強調する通説では説明できない知見もまた多かった。

(3) 具体的な知見を以下に示す。

① 教育アスピレーション

約 20 年の間に高校生女子で四年制大学への進学希望が増加する傾向にあり、男女の進路希望の分布が似通ってきている。子が女子である親の大学進学期待が高まる傾向にあり、高校生の進路希望と似通った分布になりつつある。第 5 次調査から第 6 次調査の間では、進路多様校女子における大学進学希望者の顕著な増加が見られる。どの学校タイプに通っているかが高校生の進路志望や親の進路期待に依然として強い影響力をおよぼしている。また、子どもが女子である母親の場合、学校タイプがもたらす影響が強まってきている。大学・短大・高専卒の父親、母親が、男子への大学進学期待を弱めている。高校生の進路志望と親の進路期待の関連は高まる傾向にあるが、母親と女子の間関連のみ、弱くなっている。これらの結果は、大別して 2 つの趨勢を示している。第一に、「高学歴化の終焉と高原期の継続」により、「学歴経験の世代間同質化」がもたらされる段階に入っている。第二に、学校タイプによる影響力の弛緩、出身階層による影響の低下といった従来の構図が維持され、そのなかで男女の競合関係がさらに高まり、進路に関する性差が希薄になってきている。

② 職業アスピレーション

現代高校生の職業希望（職業アスピレーション）に関しては、男子では「未定」、女子では「専門職」を希望する者がもっとも多く、また、男子よりも女子の方が具体的な職業志望をもつ者が多かった。第 3 次調査からの変

化についてみたところ、男女ともに、第 5 次調査で減少した「専門職」と「事務職」で若干の増加、「熟練労務・農林」で若干の減少がみられたものの、全体的な傾向に大きな変化はみられなかった。しかし、「専門職」志望について、職業内容の中分類レベルでみれば、変化もあり、全般的傾向として、低調な雇用環境の影響を受け、堅実な職業選択（職業志望レベルではあるが）をする安定志向の者が増加する傾向がみられた。また、「専門職」志望や「未定」を規定する要因について検討したところ、「専門職」では、男子であることが負の、進学校に通っていること、母親が専門職や管理職であることが正の影響を及ぼしていた。一方「未定」については、男子であることが正の、進学校に通っていること、仕事に生きることを重要と考えていることが負の影響を及ぼしていた。職業というものに対してどのような意識をもっているかも、職業志望を決定する重要な要因ではあるが、依然、出身階層（親の職業など）や本人の学業的達成の要因の影響が大きいことが明らかになった。そして、職業選択において、学校による選抜・配分機能が、いまだ重要な役割を果たしていることが示唆された。

③ フリーター観

第 5 次調査と第 6 次調査との間で、フリーターやその生き方を容認する高校生の割合が大きく減ったことが明らかになった。また、高校生のフリーター観には、性差が見られないものの、学校種や進路希望で大きな差があることがわかった。特に、進路多様校・進路未定の生徒ほどフリーターを容認する傾向があった。さらに、進路希望が同じ生徒の間でも、成績自己評価や就職可能性認知の度合いによって、意識の違いがあることも明らかになった。高校生のフリーター観は、学校の社会的文脈や成績のような自己能力の理解に影響を受けやすいと言える。

④ 学習意識・学習行動

近年、高校生の学習意欲が高まったものの学習方法に変化は見られない。より詳しい分析結果は次の通りである。第一に、高校生の「勉強する理由」に関する意識を「学習動機」と呼ぶと、学習意識は、内発的学習動機と外発的学習動機の 2 種類に分類できるが、これら 2 つの学習動機は、1999 年以降、ともゆるやかな上昇傾向にある。第二に、勉強の進め方に関する高校生の自己認知が「学習方法」を表すと考えると、学習方法は 1999 年から大きく変化しておらず、新学習指導要領が目指したプロセスや論理を重視する学習方法が浸透していない。第三に、第 5 次調査（2003 年）に比べると、高校生の学習時間はやや増加している。学習意識との関連を見ると、学習意識は内発的学習動機との関連が強く、内発的学習動機が高い生徒ほど学習時

間も長い。一方、外発的学習動機と学習時間の関係は比較的弱い。第四に、親子間の学習意識の関連はそれほど強くないが、いわゆる「意欲格差」が存在し、学校外学習投資と出身家庭の関係は大きく変化していないけれども親学歴による経験率の格差および学校外教育投資の有無による教育達成の格差が拡大している可能性がある。

⑤ 社会化価値

「生きる力」「人間力」といった個人の自律性を強調する 1990 年代の教育言説や政策理念とは裏腹に、親の社会化価値においては、父母とも自律性（自己指令性）よりも同調性を重視する傾向が強まっていた。父親・母親とも社会化価値には学歴・職業による差異がみられ、学歴が高いほど、また職業上の地位が高いほど、自律的な価値を子どもに期待することがあきらかになった。親子間の自己指令性の相関をみたところ、父親-娘の間での相関が有意ではないものの、それ以外のペアでは相関係数が有意となっていた。親子間コミュニケーション頻度に関しては、「家族との外出」の頻度が多いほど、父親-娘・母親-娘間で親子の価値が一致する傾向がみられた。また、「家族の助け合い」についても、その頻度が多いほど、親子の価値の相関が高くなっていた。さらに「家族との会話」においては、母親-息子、父親-娘および母親-娘間において親子の価値の関連が強くなっていた。

⑥ 規範意識

世代論の観点から、現在の高校生は過去の時代の高校生と異なった規範意識を持っている、あるいは過去に比べて規範意識が低下している、と主張されることがある。しかし、単純集計結果を見る限り高校生の規範意識がそれほど低いとはいえない。学校生活に関する規範に対する逸脱を「悪い」と評価する人の割合が、社会全般に関わる規範に対する逸脱を「悪い」と評価する人の割合よりも低めだという傾向がある。第 4 次調査から第 6 次調査までで比較可能な項目に限ってみると、少なくともこの約 8 年の間に規範意識がそれほど低下したとはいえない。高校生の約 6 割は、他人に迷惑をかけなければ何をしてよいという、「他者危害排除の原則」と呼ばれる自由主義の基本原則にもとづいて規範の重要性に序列をつけて評価していることが推察される。これは、コールバーグの道徳性発達理論にもとづけば、高校生の多くが「社会システムと良心」あるいは「法と秩序」という観点から、自律的で形式的な推論にもとづいて内省的な道徳判断を行っていることの傍証と考えることができる。

⑦ 相談ネットワーク

この 10 年ほどのあいだに、仙台圏の高校生の相談ネットワークは、大人への依存度を

強める方向へと変わってきた。温情主義的な家族関係への移行を受けて、家族に対する相談は増加した。また、勉強を含め学校内の活動がより重視するようになり、それに伴い先生に対する相談も増加した。女子に限りみられた変化の特徴は、親友との関係のあり方の質的变化に基づいて、親友への相談が減少したことである。一方、男子の変化の特徴は、悩みを独力で解決する傾向が弱まったことである。ただし、この変化の意味の特定は、今後の課題として残る。相談ネットワークの時点間変化には学校差がみられないが、先生への相談の程度のみには学校によるばらつきがみられた。それにより先生への相談の多い学校と少ない学校を分かつのは学校または教師側の要因であると推測でき、教師や学校側の心がけや工夫により、良好な生徒・教師関係が豊かに存在する学校へと変えていける可能性が示唆された。

⑧ 父不在高校生の生活と意識

父不在高校生の大学進学希望率の低さ、学校外での友人関係の希薄さなど、必ずしも明るとはいえない側面も確認された。その一方で、父不在高校生女子は、相対的に不利な状況に置かれながらも読書経験は豊富であり、彼女らが積極的に活動している様子も浮かび上がってきた。「父不在」という言葉には、「暗い」「生活が厳しい」といったステレオタイプ的なイメージが付きまとう。しかしながら、そういったイメージだけでは捉えきれない父不在高校生の生活側面も確かに存在することが示唆された。これまで、父不在高校生は少数派と考えられ、十分な関心が向けられてこなかった。しかしながら、彼/彼女らは今や仙台圏の高校生の 7.9% を占める（第 6 次調査）。この数字はかなり低く見積もったものと判断するべきであろう。もはや決して少数派とは言えない父不在高校生をステレオタイプ的なイメージで捉えるのではなく、今後は彼/彼女らの意識や生活実態をより詳細に明らかにしていく必要がある。

⑨ 自由記述データのテキスト・マイニング

調査票の末尾におかれている自由回答欄に書かれた記述を対象にして分析を行った結果、生徒・父・母三者間でその内容に違いが見られた。生徒が多く言及していたのは学校や教師、日本社会に対する意見であるが、トピックの幅は比較的限定されていた。逆に母親はトピックの幅が大変広く、特に子どもと家庭に対する意見が多かった。父親は母親ほどではないが、生徒よりは広いトピックに言及していた。母親による自由回答の内容の幅広さには、母親の高い子育てへの関心が要因として考えられるのではないかと推察された。また、8 年前に実施された第 4 次調査と比較して、自由回答の内容に変化が見られ

るのかも分析したところ、自由回答欄に書かれる言葉には、時代を反映する語の影響があることがわかった。例えば、「格差社会」という流行語が2時点間に人々に広まったことによって、公平感・平等感について述べる自由回答が増加したことがあげられる。自由回答欄は経済状況や雇用情勢にも影響を受けており、2時点間で経済や就職への言及が減少した背景には、景気の回復と就職状況の一時的改善があったことも考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 海野道郎, 現代日本の不公平感—「仙台高校生調査」における20年の変化—, 東北文化研究室紀要, 50:123-138, 2009. 査読無.
- ② 神林博史・片瀬一男, 親子調査における親欠票の原因—仙台高校生調査データを用いた分析—, 社会と調査, 2:20-27, 2009, 査読有.

[学会発表] (計2件)

- ① 木村邦博, カテゴリカルデータ分析におけるグラフィカル表示と数式, 日本行動計量学会第36回大会, 2008年9月5日, 成蹊大学.
- ② 阿部晃士, 学歴社会イメージの時点間比較: 仙台高校生調査の分析, 日本行動計量学会第36回大会, 2008年9月3日, 成蹊大学

[図書] (計1件)

- ① 木村邦博編, 教育と社会に対する高校生の意識—第6次調査報告書—, 東北大学教育文化研究会, 250頁, 2009

[その他]

東北大学教育文化研究会ウェブサイト:
<http://www.sal.tohoku.ac.jp/behavsci/WorkGroups/HIGH/index-j.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木村 邦博 (KIMURA KUNIHICO)
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号: 80202042

(2) 研究分担者

(なし)

(3) 連携研究者

海野 道郎 (UMINO MICHIO)
東北大学・教養教育院・特命教授

研究者番号: 90016676

片瀬 一男 (KATASE KAZUO)
東北学院大学・教養学部・教授

研究者番号: 30161061

秋永 雄一 (AKINAGA YUICHI)

東北大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号: 90212430

古賀 正義 (KOGA MASAYOSHI)

中央大学・文学部・教授

研究者番号: 90178244

長谷川 計二 (HASEGAWA KEIJI)

関西学院大学・総合政策学部・教授

研究者番号: 00198714

土場 学 (DOBA GAKU)

立教大学・社会学部・教授

研究者番号: 50253521

潮村 公弘 (SHIOMURA KIMIHIRO)

岩手県立大学・社会福祉学部・准教授

研究者番号: 20250649

元治 恵子 (GENJI KEIKO)

立教大学・大学院ビジネスデザイン研究科・
准教授

研究者番号: 60328987

阿部 晃士 (ABE KOJI)

岩手県立大学・総合政策学部・准教授

研究者番号: 50305314

神林 博史 (KANBAYASHI HIROSHI)

東北学院大学・教養学部・准教授

研究者番号: 20344640

三輪 哲 (MIWA SATOSHI)

東京大学・社会科学研究所・准教授

研究者番号: 20401268

佐藤 幸也 (SATO KOYA)

宮城学院女子大学・学芸学部・教授

研究者番号: 10302043

村山 詩帆 (MURAYAMA SHIHO)

佐賀大学・高等教育開発センター・准教授

研究者番号: 30380786